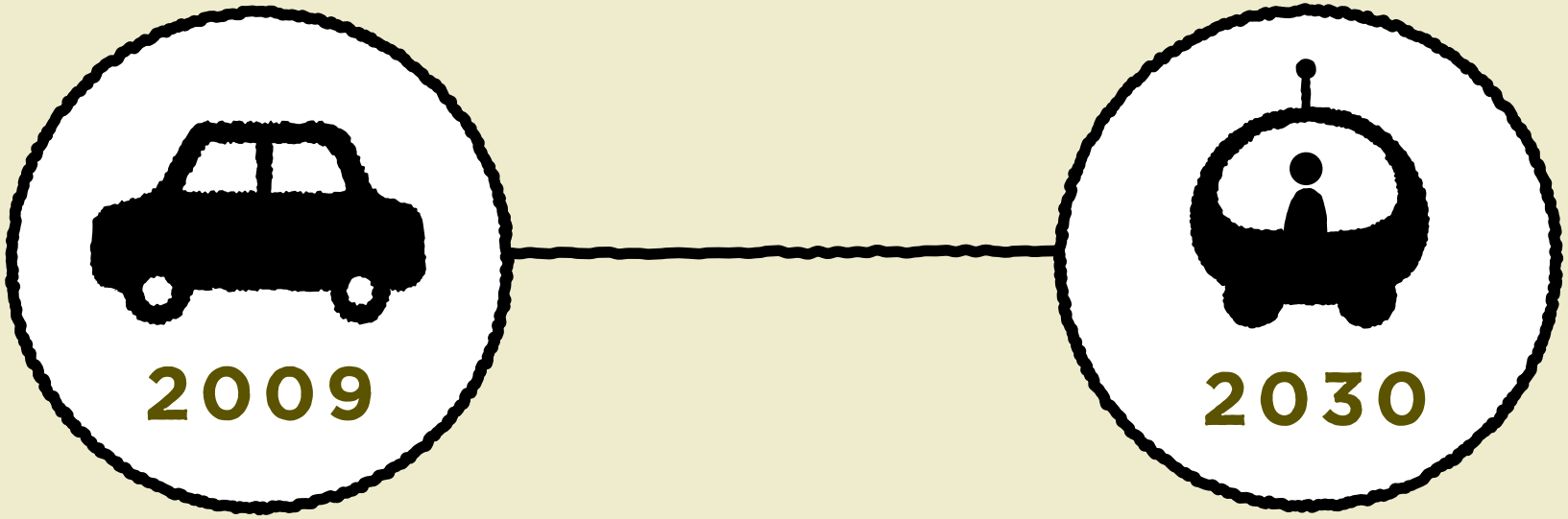
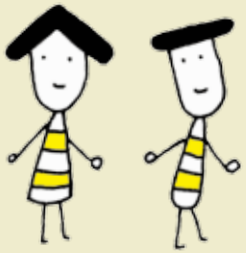


2030年の「クルマ社会」を考える

クルマに夢を感じるだろうか？
だいたい30代あたりを境に、
「感じる派」と「感じない派」とに分かれるようだ。
若い世代になるほど、「感じない派」が増える。
中年以上の人は首をかしげる。
なぜ君たち若い人はクルマに興味がないのだろう。
自分たちが若いころ、
クルマは自由のシンボルだった。
家族をつくってからは、豊かさのシンボルにも
なった。一方、そう言われた若い人も
首をかしげるしかない。
何ですかそれ？　という顔をする。
20世紀において、クルマは特別な工業製品だった。
「こんな自分でありたい」「こんな生活をしたい」
「こんな社会をつくりたい」といった
夢の中心にクルマがあった。

２０３０年は
高齢者ドライバー２割。
８０歳でも、
気ままに楽しめる
クルマライフを。

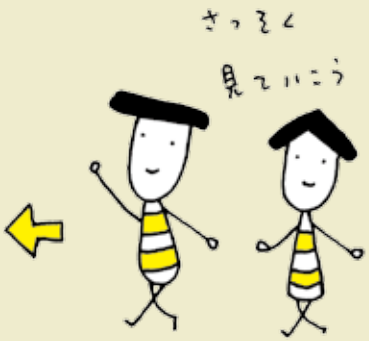
ティーチャー



アリス と テレス

クルマ社会の歴史は、大量生産の安いクルマが
登場した１９０８年の「T型フォード」から始まる。
一方、ライバルのGMが派手なデザイン・
広告戦略でそのフォードの売り上げを抜く。
本当の歴史はここから始まる。日本人は、
夢をいちばん深く信じた国民かもしれない。
敗戦後の日本人にとって、クルマ社会は文字どおり
夢のような風景だった。
都心の高層ビルとハイウェイ。
郊外には白いマイホーム、若々しいファミリー、
子どもの歓声。経済の発展、都市の発展によって、
夢は次々と現実になっていく。公害、渋滞、
交通事故など、悪夢の副作用と戦いながらも。
そして今。
誰もが日々実感するように、
クルマ社会は大きな曲がり角にある。

ドア・ツー・ドアで
すぐに来る
究極のオンデマンドバス。
交通難民を救う
切り札かもしれない。



若者のクルマ離れが進む。
そもそも若者が減っている。
これから増えていくのは高齢者ドライバーだ。
人口が減れば都市は縮んでいく。
人口減少の進む地域でクルマを
運転できなくなると、交通難民になってしまう。
一方、環境制約がクルマの心臓（エンジン）
を変える。やがてその姿かたちや
振る舞いをも変えていくだろう。
曲がり角の向こうに
２０３０年のクルマ社会がある。
しかし、クルマにしても社会にしても、
夢のモデルがどこか他所（よそ）の国にあるわけではない。
だから私たちは、この国の社会で
今起きていること、
今後確かに予測できることから考える。